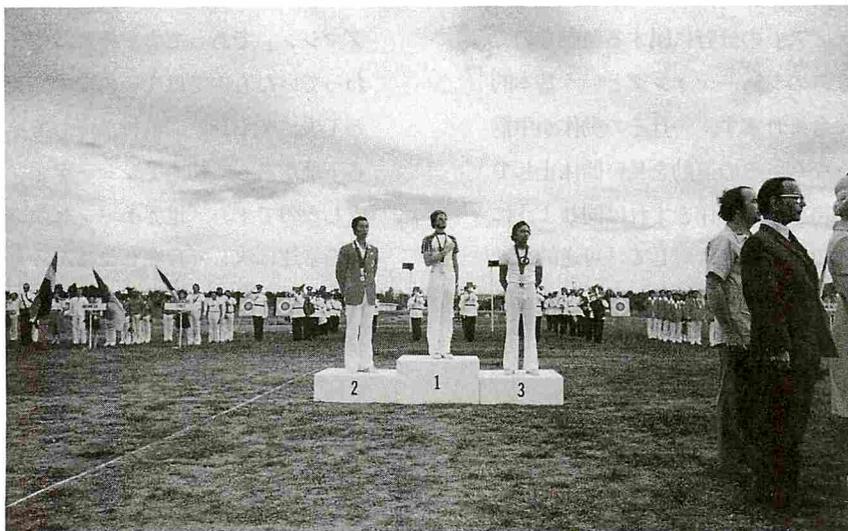


# REFLECTIONS

1990年、夏。本を書いてみたらどうかという勧めがありました。それに対して僕は「ダレルのことを中心になら」という条件を出してみたのです。そして、これを前提に僕のこのアイデアをアメリカのダレルに率直に伝えてみたところ、彼の答えは「カメイが書くなら」ということで全面協力するとの約束を快くしてくれるものでした。ダレルはそのアイデアにも内容にも一切の注文をつけず、

そして写真も新たに撮影するなら協力するとまで申し出てくれたのです。しかも、一切の名声や金銭を要求せずにです。僕はこのとき「ダレル自身が執筆する気はないか」とも尋ねたのですが、彼はきっぱりとその気のないことを話してくれました。

ダレルの了解が得られてからは、僕はこの本を書くのに多くの時間を必要としませんでした。ま



1977年、キャンベラ世界選手権。「世界チャンピオン」をもっとも身近に実感させてくれた瞬間。

た、そのための写真のほとんども、すぐにアルバムのなかから探し出すことができました。理由は簡単です。普段から考え、思い、行っていることを単に文章にするだけの作業だからです。ワープロと暇さえあれば、何ら考えたり悩んだりすることもないのです。ここに書かれている内容はすべて僕のアーチェリーの根底となるものであり、僕の身近な人なら知っている中身ばかりかもしれません。しかし、そんな単純な作業のなかで唯一僕自身が再確認させられたのは、やはりダレルの偉大さとそれゆえに僕が彼から受けた影響の大ききです。

僕がアーチェリー始めた1969年、時代はレイ・ロジャースからハーディー・ワードへと移り変わったときでした。翌1970年、ワードが全関西選手権にオープン参加のため初来日したとき、この大会に参加した僕は初めて見る「世界チャンピオン」に大変な感銘を受けました。当時、僕は高校2年生。そして、ワードは僕のシューティングの基礎となったのです。その後、1971年ヨーク世界選手権と1972年ミュンヘン・オリンピックでのジョン・ウィリアムスの勝利と驚異的な記録は彼の時代を確定的なものにし、僕に「世界」を考えるきつ

かけを与えてくれたのです。ウィリアムスはスターであり、同時に手の届かない漠然とした目標でした。ちなみに彼は僕と同じ年で、いまでは友人です。

ウィリアムスが世界の頂点に立っていたころの1973年、僕はジョンよりも先にダレルに会いました。しかし、そのころのダレルは僕にとっては「ブレザーの似合わないガキ」でしかありませんでした。それが具体的目標、そして神のような存在に変わってきたのは、やはり1975年のインターレーケン世界選手権で彼が世界記録を更新してからです。「すごい記録」と「変なスタビライザー」、ただこれだけの情報に対し、必死でそこにイメージネーションを巡らしたことを覚えています。そしてこの年、中本新二さんがもっていた1252点（1971年当時の世界記録）の日本記録を初めて10点更新するのに僕が使ったスタビライザーは、写真も見ずに単にうわさと憧れが造り出したものであり、言うまでもなく、これが僕がダレルから受けた最初の影響でした。このように徐々に僕の意識のなかでダレルが大きな部分を占めるようになるのですが、それは彼のチャンピオンとしての影響力というのではなく、もっと現実的なものでした。



1978年、全米選手権。僕のシューティングフォームの基礎となるものを教えてくれたハーディー・ワードとともに。

当時、世界で勝つためにはダレルを倒さなければ不可能だったのです。

そして、1977年キャンベラ世界選手権。個人2位、70m 1位、団体3位という僕にとっての幸せな瞬間がありました。やっと、そして多分世界で初めて公式戦でアメリカ人以外のアーチャーにダレルは敗れたのです。同じターゲットをシュートするダレルを僕は倒したのです。しかしそれも東の間、この出来事は僕に新たな目標を提示しました。漠然とした存在であった「世界チャンピオン」を、どうしてもなく身近に実感させてくれたのです。表彰台上りふと横を見ると、僕より高いところにマッキニーが立っていました。そのとき「世界チャンピオン」の称号は、世界でその頂点に立つたったひとりの人間にしか許されないことを思い知らされたのです。チャンピオンに比べれば、2位も3位も足元のひとりにしかすぎません。僕はどうしても「世界チャンピオン」になりたかった。その思いは昔もいまも同じです。だから、僕のなかにずっとダレルがいたのです。

あのころからキーワードとして、僕の心に残っているものがあります。「アメリカ人の心が欲し

い」——勝つために本気でずっと考え続けてきたことです。それが、ある錯覚や憧れを十分に含んだものであることは知っています。しかし、たとえば僕が2位になれたのも、この本を書けたのも、僕自身が十分に日本人の心をもった人間だから、ということも理解してほしいのです。当時は「もし日本人を世界チャンピオンにしようとすれば、国内で隔離してしまうか、あるいは最初からアメリカで育てるしかない」と本気で考えていました。いまも基本的な部分に変わりはありません。

世界で表彰台に上がるのは大変なことです。しかも、あと1本の矢をシュートしてチャンピオンか2位かが決まるという瞬間は、もうテクニックや体力といった小手先の世界ではありません。その個人のもつ心の問題です。心には、豊かさがなければリラックスは生まれません。そして、アーチェリーが楽しくなければ継続も向上も望めません。日本的根性論やがむしゃらなハングリー精神、コンプレックスの裏返しのようなガッツだけではチャンピオンにはなれないのです。

この本のなかで、僕はダレルのことを「アーチャー」と表現しています。それは、どうしても



1991年、京都にて。バース、マッキニー、ローテスと。

なく不器用なアーチャーです。他のチャンピオンがその栄光を背景に選手を退いた後も華やかな地位や肩書きを手に入れているのに対し、彼だけは昔とまったく変わることはない姿勢で、いまも選手としてシューティングラインをまたいでいるのです。彼の成し得たことから考えれば、もっと違った生き方ややり方があるはずなのに、そうしようとはしないのです。ダレルはアーチェリーに、そしてアーチャーにこだわり続けるのです。

1988年のソウル・オリンピック前、ダレルは当時のハミルトンの自宅（といっても車で牽引するモバイルハウスですが）で、インタビューに「モントリオール（1976年）で僕は文句なく世界一だった。しかし、1984年（ロサンゼルス）は、ほぼ世界一に過ぎなかった」と答えています。そして、「オリンピックは、だれが世界一かを決めるためのものだ。芝生の家も素敵な車もあきらめたのは、うそっぱちの金メダルのためじゃない」「金メダリストの誰もがビールのコマーシャルで稼げるわけじゃない」とも話しています。それらの言葉が、モスクワ・オリンピックをボイコットしたアメリカ政府と、ロサンゼルス・オリンピックをボ

イコットしたソ連や東欧諸国への非難であると同時に、彼のソウルでの12年ぶりの真のチャンピオンへの意気込みを示唆するものであることは言うまでもありません。そしていま、1991年。ダレルのアーチェリーに対する情熱や姿勢は、環境こそ変われど、本質的には何も変わってはいませんでした。

ダレルがアーチェリーをやめない理由。もっと正確にはシューティングすることにこだわり続ける理由。それは彼がどうしてもなく「アーチェリーを大好き」であり、「アーチェリーを愛している」からにはほかなりません。だから、僕は友人でもないダレルが好きなのです。僕も、アーチェリーという競技に他の競技同様、体力的限界や引退の理由があることを望むときがあります。しかし仮にそうあったとしても、ダレルはアーチェリーを続けるでしょう。たとえば点数や順位が初心者と競るものであっても、彼はきつとそうするはずです。僕はそんな『偉大なる世界チャンピオンダレル・ペイス』と共にアーチェリーを続けていくつもりです。なぜなら、僕もアーチェリーを心から愛しているからです。

EXTRA SPECIAL THANKS TO : Mr. Darrell O. Pace

SPECIAL THANKS TO : Mr.Komatsu Yoshimori (archery magazine)

Mr.Izuta Tadao (yamaha archery div.)

Mr.Kajikawa Hiroshi (World 5th at York)

Mr.Sueda Minoru (yamaha sports div.)

Mr.Shig Honda (professional archer)

Mr.Richard Mckinney (world champion)

Mr.John Williams (world champion)

Mr.Hardy Ward (world champion)

Mr.Duglas Brothers (world field champion)

亜矢・亜弓・亜射 (my three daughters)



『過去のことは考えない。過去ではなく、将来に  
目を向ける。過去はどうやっても変えることはで  
きない。でも、未来なら自分の力で切り拓くこと  
ができるからね』

ダレル・ペイス

AIMING FOR THE BEST 定価 2,200円(本体2,136円)

1991年7月25日 第1刷発行

著者 亀井 孝

発行者 小松克守

発行所 (株)レオ・プランニング

〒169 東京都新宿区高田馬場4-30-23

テラス高田馬場206

TEL 03-5386-6281

FAX 03-5386-6030

郵便振替 東京1-395438

印刷・製本所 東京書籍印刷(株)

落丁・乱丁は本社でお取り替えいたします。

©レオ・プランニング

本誌掲載の写真、イラストレーション及び記事の  
無断転載は固くお断り致します。

平成3年8月10日発行

発行所

(株)レオ・プランニング

〒169

東京都新宿区高田馬場4-30-23

テラス高田馬場206

☎03-5386-6281

定価二二〇〇円(本体二一三六円)

